広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | イオン・ドラグミス「サモトラキ」（三）第五～七章 |
| Author(s) | 福田，耕佑 |
| Citation | プロピレア , 25 : 124 - 145 |
| Issue Date | 2019-08-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048252 |
| Right | Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会 |
| Relation | |

翻訳

# イオン・ドラグミス[一]「サモトラキ[二]」(三)

福田　耕佑　訳
京都大学文学研究科博士課程後期
アリストテレオ大学哲学部中世・近現代ギリシア学科

## 第五章：共同体

サモトラケ島はペラスギ人、ギリシア人そしてローマ人にとって聖地であった。そこでは民衆と巡礼者が混ざり合っていた。だが偉大な神々の宗教は消え失せてしまい、ただこれらの記憶だけが、島の空気をゆっくりと漂う、消えてしまった芳香のように残っている。しかし山の岩と草は分かる者にのみ語りかけているのであり、パリアポリの大理石もかくの如しである。今なお読者を有す古い物語は、書物の中で結晶化し保存されている。

日没時にはサモトラケ島から、海の光の中から先の鋭く切り立ったその頂上が姿を現している、アトス山を目にすることができる。これは別の宗教の聖地に変わった。老いも若きもサモトラケの聖地へ巡礼に赴く。その次に別の聖地、多くの修道院を備えた聖山に赴くのだ。将軍と王たちはサモトラケで礼拝する。王子たちだけが聖山に赴く。カベイロスを崇拝し密議を行っていたサモトラケ人自身も、今では彼の宗教が聖山に修道院を建たせているキリストを信仰し礼拝している。

人間は、独力にせよ神の加護に依るにせよ、常時どうにかして自分自身を救わねばならない。どの神々が救い手なのかはどうだってよい。もし古代の神々が魔力を備えた強力な救済を失うのなら、新しい神々が人々を救わねばならないというだけの話だ。

かつてはかの古代の神々を礼拝していたサモトラケ人自身にとっても、これらは知られざる存在になってしまった。ある日、洞窟に入って奥を覗き、多くの人形が列になって並んでいるのを見たサモトラケ人がいたそうだ。彼は恐ろしさのあまり言葉を失ってしまった。これは古代の神々の像であり、かの世代の人々が立たせたものだった。

サモトラケは没落した。聖山も没落するのだ。だがサ

モトラケの偉大な神々に加え、唯一の神と聖人たちを崇拝した人々、この人々は残される。神々が彼らに加護を与えてあらゆる危険の中を助け、人々は生きながらえ、今なお生きているのだ。かのギリシアの神々と共にギリシア民族【φυλή】が死に絶えることはなかった。神々というのは人間たちを救う限り生きているのだ。彼らを救ってしまうや否や、その時は余計な物になってしまって退場となり、必要に応じて他の神々がやって来るのだ。神々は偶像のように没落しては滅亡する。しかし人々は生き続けている。民族の根は、力強いあらゆる宗教的な根に由来しているのだ。

いかなる種類の共同体組織がこの民族を形成して今ある形にし、そして何世紀間持続させたのだろうか？　現地での自治に他ならない。そしてこれこそが、人類に未解決な他の諸要因の唯一の結果であろう。だが、海岸と多くの島々を形作り、同じ大陸の下に埋もれていき且つこれらを分かつ海が、原因の一つであるようにも思われる。

偉大な神々が島にいた時代、サモトラケ人たちがどのような外国の諸国家と付き合わねばならず、そしてどうやって、それからどのようにして自分たちの自治を維持したのかということは、他の島々やあらゆる民族の関心を引き付ける問題である。

サモトラケ島は、メディアとの諸々の戦争の前は自前の船団を備える傑出した国家であった。トラキアに属する対岸に、ザレ、ゾネ、セレイオ、メセンブリアといった自領を有していた。ダレイオスがスキタイ人と戦った時、サモトラケ人たちは大王国の統治権を認めるよう強いられた。そしてクセルクセスが再びギリシアと戦うために下って来てトラキアを通りがかった時、自身の船団と共にサラミスでギリシアの船団を打ち破るためにサモトラケの船団を接収した。サモトラケの船は確かにアテネの船を沈めたが、その時エーゲの船もサモトラケの船を沈めたのだ。しかし槍兵であったサモトラケ人たちはエーゲ人たちを討ち、彼らの船の奪取に成功した。だが政治情勢が変わってサモトラケ人たちがサラミスでこの船を沈めたところのアテネ人たちがペルシア人をギリシアから追い出し、強力な海軍力でほとんどの島々やトラキアとマケドニアの臨海都市を奪った。そうして彼らの支配権、つまり国家の中にサモトラケ島をも取り込んで重税を払うように強要した。この重荷を軽くしようとサモトラケ人たちは雄弁家のアンティフォンをアテネへの

代理人に任命し、彼は「サモトラケ人たちの税」という演説を書き、これが後世の修辞技術の手本となったのだ。しかしアイゴスポタモイの海戦の後、サモトラケ島はスパルタの手に落ち、その支配下に入った。アンタルキダスの和約によってサモトラケ人たちは自治を維持した。フィリッポスの時代からサモトラケ島はマケドニアの勢力下に落ちたが、彼らもサモトラケ島に自治を残し、初期の指導者は当時まだ「王」という称号に留まっていた。マケドニアの最後の王ペルセウスがパウルス・アエミリウスに追撃され、難を逃れてサモトラケの逃れ場に逃げ込んだ時、そこにもローマ人たちがやって来て彼を島もろとも捕らえてしまった。しかし彼らもサモトラケ人たちに自治を残したのだった。大プリニウスは一世紀にサモトラケ島を自由都市と名付けた。東方におけるローマ国家は少しずつビザンツになっていった。キリスト教が漸次的にあらゆる場所に浸透し、ただ失墜するばかりの古代の神々の栄光も完全に消えてしまった。サモトラケ島の輝きも消えてしまい、他の島々と同じく、小さくて大したことのない島となった。そしてフランクの十字軍が東方に侵入するまでビザンツ人がサモトラケ島を統治していた。こうしてこの島はダンドロのヴェネチア家門の手中に落ちる。ヴェネチア人たちの後では、パレオロゴス家の何者かがサモトラケ島に、ミティリニのガテルゾス家のジェノヴァ人王子が娶った、パレオロゴス家の子女の持参金を与えるまではヨハネス・ドゥカス・ヴァタティスがこれを有していた。ジェノヴァ人の後はトルコ人がこれを奪い、今日まで彼らがこれを有している。

多くの時間と共に島は変化したが、ペルシア人が来る前に独立都市であった時からトルコ人が支配する今日に至るまで、常にギリシアであり、常に自律的であり自治的であった。それぞれの統治者に順番に税を納め、今も同じことをやっており、トルコ人に年貢を納めている。しかし内部を治めているのはただ島民だけであり、そしてギリシア的な基盤を保持するのに必要なように統治しているのだ。

現在のサモトラケ島はアリストテレスが詳述したサモトラケの都市国家から続いている共同体を有している。指導者の名前が変わろうと、事物が同じであろうとなかろうとどうだってよい。当時は筆頭の指導者は「王」と呼ばれていて、宗教的にも政治的にも指導者であった。今や指導者は「公」【δεσπότης】と呼ばれている。

公の本拠地はトラキアにあるので、聖俗両方に対する

島の代表である教区司教を置いている。任命された司祭がおり、教会において司式し、洗礼を授け、聖油を注ぎ、戴冠や聖別、死者の名を読み上げ、四旬大斎を執り行う。各々の典礼は当事者たちによって費用が賄われている。公は司祭から分け前を、各家庭から正典で定められた分を取り立てる。臨時の役得も入ってくるのだが。

教区担当者が教会を、税務官が学校を管理する。地元の長が公と一緒に様々な家庭問題と相続問題を裁定し、他の様々な私的な問題を仲裁して公共の利益のために決断を下す。教区担当者と税務官、そして地元の長たちを民衆が全体集会で二、三年ごとに選出する。というのも、民衆こそが地元の利益を見るのに適切で相応しいのが誰であるのかよく知っているからだ。公はただその選出に認可を下すだけである。地元の長は他の人々と一緒になって、税務官や教区担当者を務めることもある。彼らがあらゆる状況下にあって共同体を代表し、教師たちと結託し、公はその任命にただ認可を下すだけで、彼らが公共の金を収取して教会堂の番人や詠唱者、そして教師たちに給料を払い、必要であれば畑や森の番人を置き、公道や水道、墓地や泉を整備して、不動産から得られる収益が公共の必要に再び役に立つように公共の建物や敷地と家屋の面倒を見る。島民たちは支配者のトルコ人たちに年貢を納めるが、村々は共同体にも直接にも間接にも税を納める。教会に置かれている献金皿は、言ってしまえば教会維持や司祭と学校のための間接税である。地元の中で産品を輸入したり輸出したりしてわずかな量でも共同体に残す者も時折いる。これもまた間接税である。王に納める年貢は共同体が国家に納める責任を有し、故に島民たちが自分たちの間で家ごと、或いは個人ごとに一年で払うべき税金を共有する。

このようにして、主権を持つ者が経済を形成するのだ。どのような必要の故に多くの公僕を抱えていたのか？ホラにムディル[三]を一名任命してぼろぼろになったジェノヴァ人たちの城砦に駐屯させ、部下の港務局長と島の治安のための四人の警備兵を従えた軍曹を有していた。これらの警備兵の内二人はアルバニア人で残りがサモトラケ人である。ムディルは、何らかの殺傷沙汰が起こった時や、子ヤギ泥棒が出て現場に悪い雰囲気が立ち込めたり、ルメリから王に納める年貢を取りに時折やって来る収税吏を手伝う必要があったりした時だけ島の事に関与するのだ。ムディルがあまりにも粗野な時には、島民たちはとりわけ金銭を用いるといった間接的な手段に訴

え、これを追っ払う。一八五五年のムディルは島民たちの曰く、あまりにも冷酷でキリスト教に敵対的であったフセイン・エフェンディであった。サモトラケ人たちは他のやり方では彼を罷免させることができないだろうと思って、島民の中で二人が彼を厄介払いしてしまおうと決心した程だった。

このように島民は島の様々な征服者たちと共にあちこち奔走したのだ。ギリシア人はより強力な民衆の政治的な奴隷になったとしても常に自治を有し自己統治を行って生きていた。政治的な独立を維持し、皆で一緒に一つの独立した、強大なギリシア国家で生きることにいつでも成功するわけではないので、各都市は自分の知っているやり方で統治した。そしてギリシア諸都市は――都市近郊でも村々でも――ギリシア民族の細胞である。

十人のギリシア人がいるとすれば各々がまずあばら家を建て、それから共同体を形成するのだが、そこではギリシア的な方法で生を見ながら内部の事と自分たち自身のことを統治するのに賛同し、必要に駆られるようにして統治者との関係をどうするか、そしてこれを誰にするか決定するのだ。

かくして、ギリシア人に政治的独立があってもなくても、これらの都市は常に自治的で自己統治権を有していた。このことはギリシア民族を最終的な滅亡から救い出し、またこれからも救い出すことだろう。ギリシアの地で次から次へと圧制を敷く征服者たちは、ギリシア人たちが容易に彼らの政治的支配に従順するのを見て、彼らの間で自分たちの好きなように生きることを許容するのだ。というのも、征服者というのは民衆がただ彼らの「政治的」権威に従い、反抗してこないことを求めるもので、それ以外の何ものでもないからだ。それ以上のことを事細かに求めはしない。このように振る舞うのにも二つの理由がある。被支配民を絶望させたり怒らせたりして、彼らの統治における危険因子にしてしまわないようにするためである。また多くの骨折り、出費、戦争と流血を避けるためでもある。政治家としては戦争などするよりも、身内の近くで地元の利益を見定める方がずっとよいのだと感じている。そして従属民が政治的独立を求めさえしなければそれで十分なのだ。彼らの目的は、ただ意地になって自分たちの周りの各々の異質な生をかき消そうと争って消耗することではない。外国人民衆が自分たちの政治的統治者として認めればそれで十分であり、そうすれば引き換えに統治者たちは自分たちで自分たちの

こと、つまり彼らが地元の利益の面倒を自分で見ることを許容するのである。ただちに被支配民は、頭を上げ首肯する動作を見せるのだ。そして被支配民は改めて自分たちの政治的利益を所有するのだ。権力者や征服者が自分たちの全生命を掌握することのないように、彼に何かしら譲歩し、政治的な独立は譲り続けねばならないのだと感じている。彼は蛇であって食べずにはいられないから、蛇には食べ物を与えておけ、というわけだ。このようにして少なくとも自分たちの皮を救い、この皮で自分たちの民族の存続を図るのだ。どのような征服でも、征服者と被支配民の静かなる合意であり、種々の利益の新しい均衡化である。

このようにサモトラケ島は常に自己統治的でギリシア的であった。様々な異国の征服者たちが、人々の様々な影を超えて鏡の表面を超えていくようにサモトラケ島を通り過ぎていった。そこでも、島を完全に屈服させ、永遠に自分たちの物にしたと思い込んで、自分たちの隠された欲求に従って臣民を作り出したのだと信じ込んだ。そして自分たちの政治的な権威が失墜すると島から去り、再びサモトラケの男女が十全に住まうようになったのだ。それから他の統治者たちがやって来て島の支配権を有したが、この島は、その岩々が花崗岩であったように、その形を変えることもなく、臣民たちもギリシア人であり続けた。

いかなる文化もサモトラケ島でギリシア文明に比肩するものがなかった。いかなる文明も、島民たちの魂に潤いを与えこれを変化させるのに、この中に没入したものは何もなかった。ギリシア人を外国の文明に同化し得るということは、これをとって自分のものにするということだ。しかし同化し得るものはほぼ存在しない。大部分のものは異質であり続け、触れることもなく、その中に入ることさえしないものだ。ギリシア人は今日に至るまで自分自身を忘れはしなかった。

かくしてペルシア人、ローマ人、ヴェネチア人、フランク人やトルコ人といったあらゆる異国の征服者たちが今日までギリシア人たちを統治してきた。このように古代アテネ人、スパルタ人、テーベ人、マケドニア人も彼らを統治したのだ。現代ギリシア人【οι νέοι Έλληνες】という征服者、現代ギリシア国家の政治家と立法者たちがやって来て初めて共同体が崩され、法律でもっていとも簡単に現地の自治がかき消されてしまった。今やブルガリア人たちも、今日のブルガリアに位置するギリシア共

同体に対して同じことを行っている。ギリシア的な生を圧迫するために、ギリシア共同体を踏みにじって解体したのだ。

彼らは自分たちが何をしているのか理解している。他の外国人たちはギリシア共同体を尊重していた、例外なくだ。新国家のギリシア人指導者とブルガリア人たちだけがこれらを抹消した。これらの共同体を抹消しながら、堅固な物や組織された物を、そしてかつては通用し自然であった物を破壊してしまったのだ。ギリシア人は、今日まで何千の死を救ってくれ、そして彼らが望むなら、これからも常に救ってくれるであろう政体というものを尊重したことはない。

今に至るまで、ギリシア民族は少なくとも自己保存の意志を有しているのだ。ひょっとするとこれをも失いつつあるのだろうか？

しかし、「ある民族が勝利を欲さないとすれば、これが生き残るのにどのような価値があるというのだろうか？」そして皆が団結して一つの強大で力強い国家、つまりあまりにも自然なものではあるが、現地の自治に基礎を持つ政体を構築せずに、如何にして勝利を手にすることができようか？

## 第六章：「勝利」

甘美なる贈物を携えし者よ、勝利せよ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
黄金のオリンポス山で
ゼウスの傍に座り、
あなたは死者にも不死なる者にも
諸徳を見出すだろう。

バッキュリデス[四]

人の手になる大理石の「勝利（ニケ）」【Νίκη】、サモトラケの像はギリシアの完全なる勝利であり、民族が勝利に倦み始めた直後に花開いた、民族最後の花である。

「勝利」は常に力に向かって進み、これの側に立つ。この世には力と無力が、力ある者、より力のある者、より力の弱い者が存在する。最後の者が無力というわけだ。手の上にのせてしまえば、強者と弱者はすぐに勝者と敗者とになる。彼らが戦っている、闘士たちの間では――故に翼を有しているわけだが――ここかしこから「勝利」は飛び立ち、自分が行って腰を下ろせる場所を求めている。どちらが強いのか辛抱強く見届けるのだ。闘いが激しくなるにつれ、「勝利」は酩酊し歓喜する。力を尽くす者の姿に彼女は酩酊し、戦闘がより一層戦士たちを熱くし熱狂させる。「勝利」は身を焦がしてわくわくしながら目線を投げかけ、どちらが勝者でどちらが敗者になるのか見ようと期待している。そしてついには、嗚呼、何たる喜び。嗚呼、言葉に表せない程の快楽。彼女はもはや抑えきれなくなっている勝者を眺め、彼女も堪え切れずに走りだして羽ばたき、飛翔して彼の内に宿り、彼と一つになるのだ。そこでは祝祭が始まり、激高が最高潮に達する。勝者の身体が激しく揺れ、戦慄する。彼の足元の大地も震えあがる。

こうして昼が夜に打ち勝ち、そのあらゆる輝きを届かせ、世界にその薫り高い装飾を高らかに見せつける。こうして次に夜が昼を打ち負かし、世界にその漆黒の輝きを示し、光り輝く星々の散りばめられた天を拓く。

そして「勝利」は常に創造者であり立法者である。誰が彼女を妨げられようか？　彼女こそ「自由」であり、偉大な喜びである。

自身の内に自由を所有するこの自由人は「この喜びに

は永遠に持続してもらいたい」と言った。なぜなら、最も偉大で、他者に対し冷酷で情け容赦のない生の喜びであり、勝者に与えられるあらゆる生の緊張を感じている喜びであり、人間を造り出し、神になるとはどういうことかを悟っている喜びだからである。

そして勝者は言う。

――「私は自由だ。今日に至るまで存在しなかった物質を、誰も見たこともおそらくは想像したこともない物質を作り出せる程に自由なのだ。自分が望んで想像するように、世界を創造することができる。古い物質も新しい物質も、過去の物質も現在の物質も、私が全てを創造しあらゆる瞬間に新しいものを創造できるのだから、私を隷従させることはできない。世界の創造といえど、全ては私にかかっているのだ。私は何にも怯えることはなく、私は自由であり、私には何の重荷もない。私は冷酷であり、生も死も私には全くどうだってよい。この知識に私は酩酊し、そして踊り歌う。私にとって全ては古く、もはや既知の物で無目的な物に思われ、私を怯えさせるものはこの世界に何もなく、自分が何物をも切望しなくなった時には、私が過去の世界と全く異なる、無目的な新しい世界を創り出すのだ。なぜなら、私はいかなる目的のためにも戦いはしないからだ。目的無く、勝利のために戦うのだ。人々の記憶と言葉、そして実践は私の奴隷であり、私の苦痛と喜び、そして悲しみも奴隷である。私の勝利と偉大さのために唯一必要なのは自分自身だけなのだから、私は自分自身をかくも愛している。それから、私は自分自身を軽蔑している。私は世界全体を渇望し、この世界は私のものである」

こう言って、未来の年月の計画を立て、塔と城砦、そして宮殿を建て、そして再び塔と城砦、そして宮殿を倒壊させ、敗者たちの神殿と家々を荒廃させるのだ。勝者たちは自分たちの倫理を作ってこう言うのだ。

――「これが法となるであろう」

彼は美しい物、強大な物、そして生と世界の有する比類なき物を取って啜り、自分の物にする。自分の目の前にある好きな物を略奪する。というのも実際この世界は彼の物だからである。彼の前では誰も頭を上げて見ることも反論の言葉を見出し言うこともできないのだ。「勝利」の絢爛は目も眩む程で、轟音で耳がつぶされ口もきけなくなり、その無敗の力が他者の各々の意志を引き裂いて、勝利を欲する各々のより卑小な力を木っ端微塵にする。あらゆる力は、それがどれ程卑小なものであろう

と勝利を欲するものなのだから。どのように生きればよいのかではなく、どのようにすれば勝利することができるのかを見ているのだ。勝利を掴むこと以外の如何なる他の目的のために戦うことはない。炎を燃やし、各々の炎は常に明るく効果的であろうと欲するが故に戦うのだ。力は「勝利」を求め、「勝利」のために闘い死んでいくのだ。他の全てのことはきっかけであり、口上であり言い訳なのだ。そして勝利を手にすることが不可能だと分かって初めて、隠匿と卑劣、そして浅知恵を用いて、ただどのように逃げ出して生き残れるのかということに視線を向け始めるのだ。「勝利」は、結果として自身の理想を人々に植え付ける。まず、そこから無数の役に立たない種々の理想と理論が膨張していくような、倫理に関する理論を押し付け、これが人々に受け継がれていくことになる。というのも、生は穢れなく、理論に由来する処女的なものであり、ただ人間が勝利と敗北によって暇潰しのためにこれらを明らかにし始めただけのことだからである。そして勝者が人々に植え付けた理想は、人々を無力にしつつ幻惑して遊戯に耽らせ、そして理論は人々を最終的にその奴隷にしてしまった。だがその偉大な力を失うや否や、立法者ではなくなってしまうのだ。あの時彼が生み出した理想も、彼の無力の結果でありその反映なのだ。そうなってしまえば、「勝利」はある日彼を見放し、ちょっとした痺れを翼から揺さぶり落としたいかの如く羽ばたいて、他の所に去ってしまう。個人としても民族としてもだ。勝っている時は民族も自由であり、建築物や要塞、そして理想を創造するもので、少しずつ衰退して勢いを失って化石になり、硬直化して理想が生み出した理論の奴隷になってしまうまでは自由と遊戯を享受する。そして「勝利」は再び飛び出して、羽ばたいた後他の所に行ってしまう。

「勝利」とは世界を揺さぶりぐらつかせる、より大きな力の没落である。

「勝利」とは「喜び」であって「自由」であり、立法者であり解放者、そして女王である。

「勝利」は人々が「暴力」と呼んでいる力が命じることを実行し、それの欲することを課し、いかなる疑問を差し挟むこともない。

酩酊たる「勝利」は、王国として世界を所有しており、この大気も大地も天も自身の所有物なのだから、鼻孔を開いて全空気を吸い込む。

「勝利」は鷲の目を有していて、この目は世界を自分自

身の天国を見るかのように、人々を蟻を見るかのように見る。

「勝利」には翼があるが、この翼は軽くはない。身体を有しているが、この身体は固い本物で、堅い女体である。彼女は見る者はこれに恋焦がれることだろう。

しかし「勝利」は私自身の憧れではなく、私の欲求も「勝利」に対するのではない。「勝利」は存在し、上位の存在である。もし私が「勝利」に恋し恋焦がれるとしても、これが私の物になることはない。

「勝利」は風のように前進する。翼があるのだから、いかなる障害もこれに立ちはだかることができない。そして大気は「勝利」というドレスを纏い、彼女の堅い体に上品なシルエットを作り出す。

風によって直に肉体に張り付いた、下側が極めて繊細な襞になっているドレスが、彼女の峻厳な胸元と腰、そして固い曲線を描いた足元を覗かせている。

勝利は、その翼を開くとき、自分の前にトロフィーと王冠を握った裸の丸みを帯びた手を伸ばす。

「勝利」とは眠り、凱歌、調和であり、酩酊であって笑いであり、喜びであって女神である――有翼の女性だ。

「勝利」は光であり、発光であって炎である。「勝利」は星の如く輝き、熱した鉄のように燃え、雷を放つ。「勝利」は光り輝いている！

しかし「勝利」は栄光ではなく、たとえその過去が鳴り響いたとしても何の名声も一顧だにしない。見えようが聞こえようが彼女には届かない。欲することも気にかけることもない。

脅しとして勝者が有している「勝利」が小高い海岸、トラキアとマケドニアの正面にあるサモトラケ島の岩に立っているのだが、ある戦闘艇に上って舳先に立って、海に出た。島を離れて他の所へ向かう。しかしそこを去りながら人々に見つからないように彼女は頭を隠した。なぜならもはや彼女を引きとどめるに値しなくなった島と美しい民衆を見捨てる彼女の顔が、異様な程に悲しみに満ちていたからだ。こんな経験は彼女にとり初めてであって、あたかも他の勝利者の下へ向かいたくはなく、或いはしぶしぶ向かっているかのようであった。しかし翼を隠し忘れてしまい、島を去って永遠に他の場所へ向かに際し翼を羽ばたかせていたのを忘れていたのだ。そして翼のせいで人々に彼女だと気づかれてしまった。

「勝利」には翼があり――彼女の運命もそうなのだが――いつでも出奔して、たとえそれが獰猛で未開な人々だ

としても、より強い者の所へ行かねばならないのだ。「勝利」は民族の優美さや美しさではなく、力を見ているのだ。

しかし勝者は「勝利」が不動の存在などではなく、むしろ翼があって同じ場所に留まっていられないということは知っているのだが、忘れてしまったのかこう言ってしまう。

――「日の暮れるまでは、昼は私の物であってほしい。代わる代わるやって来る、命に溢れた日々、衰退に取り囲まれつつも勝利をもたらす日々が私の物であってほしい。私はいつまでも勝利者であり続けたいのだ」

そして彼女が死んでしまうことのないよう、彼の周りからいなくなってしまうことのないように、彼女の石像や偶像を建てる。だがそんなものは何の役にも立たず、勝利は常に立ち去ってしまうものだ。アテネ人たちは彼女を自分たちの街に留まらせるために彼女の翼を断ち切って、アクロポリスの端に彫刻で神殿を築いた。しかし彼女がそこに住まうことはなかった。彼らが彼女を引き留めておくに値しなかったので、彼女は新しい翼を作り、その翼で再び飛び去ってしまったのだ。大理石の神殿は崩壊して粉々になり、像も壊れてしまった。

かくして我々の若さも斜陽にあり、花は萎れ恋も蒸発し、我々の愛する者も死んでしまうものだ。しかしいかなる時にも若い命が生まれ、新しい花が開花するもので、「勝利」はこれを待っているのだ。「勝利」は恋愛の如く若さを追求する。蝶がその周りを飛び回っていると、時々恋によって撃ち落されてしまうかのように。「勝利」が私たちから離れ去るとしてどうだというのだ？　他の人々の所には行かないとでもいうのか？　彼女が死ぬとでも？　弱者から離れて行ってしまう時には、彼らが破滅し死に向かっているのであり、彼女は若者たちを見て彼らをえり分け、自分が落ち着くのに適した者の所に行こうとしているのだ。「勝利」は冷酷であるが、彼女にとって病人や老人、そして死体とはさしずめ何であろうか？　彼女は不死であるが故に、しぶしぶ死に行く人々を離れるのだ。

## 第七章：フェンガリ[五]

だが、大地を揺るがす神の監視の目は節穴ではなかった。
神はトラキアの島――
木々の茂るサモス島の山の山頂に腰をおろし、
戦いの模様を興味深げに眺めていたが、
ここからはイデの全山、
プリアモスの町、アカイア勢の船陣もはっきりと見える。

イリアス[六]

教師が私に、あるイギリスの古典ギリシア学者がフェンガリに登って、ホメロスに曰くこの上からポセイドンが戦闘していたアカイア人とトロイア人を見ていたのだから、本当にこの頂上からトロイアを見ることができるかどうか見てみようと思って、わざわざイギリスからサモトラケ島にやって来た、と言った。学校を出た時分に学んだのは、教師というものを過分に信用しないようにすべきだということではあったが、教師の話したサモトラケについての物語は私を大いに楽しませてくれた。というのも、それは芸術にさえ首を突っ込んで探求して回り、時折その下に真理を見出すために芸術をひっくり返しさえする科学の狂気を示すものだったからだ。

かのイギリス人は、トロイアが本当にサモトラケ島から見えるのか、そしてホメロスが嘘をついてはいないのか確証するまでは気が落ち着かなかったようだ。もう一人のイギリス人は我々に、トロイアから、つまりインブロスの上からサモトラケ島の頂上が見えるのだからあの話は真実ではないのかと言っている。私自身も、テネドス島の近くを通りながら、蒼色の夢の如くインブロス島の後ろに、これよりも遥かに高く傲然とそびえ立つサモトラケ島を見たということは保証しよう。私はその際立った頂上に感動を覚えたが、それは科学的な独善からではなかった。

あるドイツ人が老プリアモスの骨を見つけてこれに触れ、骨のない老人がいるわけがないことを証明しようと出かけて行って発掘を行った。別の者はトロイアの土にその手で触れ、アンドロマケの夫がアキレウスと戦うために出陣した時に彼女が流した涙によって、今でも土が湿っているかどうか見てみようなどという気を起こしてみせたそうだ。そして三人目の考古学者は、サモトラケ島でフィッリポスと初めて知り合ったアレクサンドロスの母オリンピアダが本当に身ごもったのかどうか検証し

ようとして来ていたのかもしれない。ヘレネを見たこともなければ、自分がかの詩人を信じなければならないものか未だ見当もつかぬが故に、私は彼女の美しさに幻惑されるのだ。考古学者には想像力が必要だったのであろうが、想像力を持っていようが、それでは考古学者は勤まるまい。そしてピラトがキリストに問うた短い言葉に私は熱狂を覚える。

――真理とは何か？

というのも嘘なのだと言わんばかりに皆が真理について語るからだ。真理は自分の目の前にあるにもかかわらず、これを見つけ出そうとしている。真理は隠されているものだと思い込んでいるが故に、存在しやしない所に見つけ出そうとしている。しかしなぜ真理が雲隠れしたりするだろうか？　私は生の方が好みなもので、真理を求めたりはしない。そして真理を**作ってしまう**のは至極容易であるにもかかわらず、至る所でわざわざ真理を**明らかにしようと**探し回って打ちひしがれている憐れな人々を、私は笑うのだ。彼らに叫ぼう――だがどうしてあなた方は物質の背後を探しているのだ？　あなた方の目の前を見ればいいのではないか？　真理など存在しないのだから、隠れることもできやしない。だが、寄ってたかって大きな真理になろうとするのではなく、むしろ常に小さな真理である続けるような、極めて多くの微細な真理、これは存在しよう。目を開けて、実際見ているように物質に目を向けた方がよかろう。疲労しようが過度の情熱を傾けようが、望むものやできるものを作り上げるがいい。あなた方はお好きなものを作ろうができるものを作ろうが自由であり、あなた方の作り上げるものが真理だと決して信じてはならない。人間が作り上げるものは常に物質であって偶像であり、作り手の個性や能力或いは無力さの産物であり、そして何千という気質や能力がある。私は偶像を打ち壊し新しい偶像を作り上げる人々を予感しているが、もし彼らがやはり偶像が自分の手になる物だということを知らないとすれば、私の気に入ることはないだろう。真理を見出そうとして、どれ程偶像を打ち壊し粉々してこれを足蹴にしようとも、何であれ創造を行おうと欲すればすぐに再び偶像を作り出してしまうことになってしまう。これが人間の運命というものだ。作られたものがすべからく**真理**だなどと信じてはいけない。なぜならそれは・・・・嘘だからだ。しかしこの嘘は人間が生きていく上で有益なのではないのか？

こんな風に考えながらフェンガリに登った。
そしてもちろんフェンガリの山は母であり、裸で岩だらけの、かつては火山であった。島の岩盤は大部分が花崗岩と大理石の敷石であり、住民が言うには多くの金属が含まれている。
道を登りながら私たちは古いモミの木に囲まれた冷たい泉に腰かけた。ある時そこで多くのモミの木を目にしたものだったが、今では島民たちが木炭にしてしまい、サモトラケ島の小高い頂上は全てはげ山になってしまった。そして島の植物の生態は豊かである。道を登りながら私はプラタナスと樫の木、リンゴの木と緑の木々、そして杉とヒマラヤスギ、オリーブとモミの木を目にした。向かいの頂には、深い渓谷の奥にもう一つ泉があった。その水は水晶のようで、神経を病んで死にかかっている人々も含め病人たちがやって来て、凍った水で体を洗って癒しを得る。そしてこの場所は、泉の周り中に生えているカエデ【σφενδάμια】にちなんでスフェンダミと呼ばれている。しかし全ての名前は分からない程たくさんの灌木と草を見た。オレガノ、タイム、ペパーミント、ハッカ、シダ、エリカにセージ、そしてサモトラケ人の案内人がルツーキアという名前だと教えてくれた、極小のスモモのように小さい、赤味がかった実をつけた植物を見つけた。私が目にした他の全てのものは、知らないものであった。モミの木の泉をやり過ごしてすぐ、このサモトラケ人は、海とつながっていてその内側の根が下の海岸に出ているという洞穴を探して、私に見せようとしていた。ことによると真実かもしれないが、このような伝承を持たないギリシアの山は存在しないのだ。
私はずっと上っていたのだが、上れば上る程植物が少なくなって、岩が多くなっていった。多くの場所で坂は割れた岩だらけになって、この岩は踏んでしまえば下に落っこちてしまい、私をも引っ張って下に落ちてしまいそうだった。他の場所では、岩は固かったのだが、あまりにも鋭利でその上に立つや否や激痛が走り、穴が開いてしまう程だった。坂があまりにもきつかったので、手を使って前進せねばならなかった。そうしてもはや上れなくなると、よじ登ったのだった。
最終的に私たちは刃物のように鋭利な、高い頂に着いたのだが、そこでは風が渇いた草をなぶっているだけであった。時には背筋を伸ばし、時には身を屈めて足を引きずりながら何時間も頂から頂へと頂上が見えるまで進んでいた。風が力強く吹き、私たちを捉えようとしてい

るようだった。

神は海を出てここに坐を占めていたが、
トロイア勢に痛めつけられている
アカイア勢を哀れと思い、ゼウスを激しく恨んでいた[七]。

ゼウスに対し怒りかんかんになった神が立った場所に私は立っていた。各々の石はギリシアの石であり、何と優美なことであろうか！　その各々が神によって踏まれたのだ。私は立ち止まって目線を投げかけた。空気は夏の蒸気によってあまりにきつい荷を負わされていたので、じきにインブロス島、レムノス島、ミュティレネ、聖山、タソス島と本土が見えてきた。私の眼下には明確に引かれた境界を備えた島の全体が広がっている。東部は渇いていて、禿げ上がった山の頭蓋骨で、表面の焼かれた鼻だった。そこには野山羊が生息していた。これらを狩りに未踏の山頂へと行く者がいるだろう？　しかし、時折人間に飼われている動物も逃げ出して野生動物の近くを行くことがあるが、そのときサモトラケ人たちは、野山羊のことだが、自分たちも山頂の大鼻に飛び込み、自分の子山羊を追いかけるのだ。北側の側面は全体が、植物と大水の流れる渓谷で覆われていた。フォニアスの塔はもちろんフォニアス自身の姿もなく、そして下降していく雨水を含んだ川の渓谷が、この流れ内に岩や木々、そして人間をも飲み込んでいく。しかし平野の下では、クラデリに下るや否や畑に潤いを与える。島の山側には大きな洞穴があった。おそらくそこにヘカテが住んでいて、夜密かに彼女に奴隷が生贄に捧げられているのだ。トルコ人たちが島民を狩り立てていた時に、おそらく彼らの多くが虐殺から身を隠して救われようとしてそこに逃げ込んでいたのだ。しかしトルコ人たちは彼らを見つけると皆殺しにした。南側は砂地とオリーブ畑であり、最良のオリーブの生えた馴染みの場所、コイタダである。そしてさらに向こうの西側はマクロリエス、クセロポタミア、そしてメトヒである。

こういった名前で、かのサモトラケ人はこれら全てを私に示したのだ。彼は色々名前を口にしていたが、他の名前は私の耳に甘美に響いていた。アクロテリ、アンギストロス、スケパスト、ルルディ、スフェンタミ、アポダウロス、ケポス、クレマストネロ、パナギア・イ・クレミオティッサ、平地の名前や山や海岸、泉や川の名前。

私はその全てを知りたいと思った。私は高地に立ち、昼間の天の下太陽の下、私を取り囲んでいた風の中、私の島への欲情的な愛が私を焦がしていたので、知識に渇いていたのだ。私はあらゆる片隅、角と島の端を、そしてあらゆる岩や小石、あらゆる植物と動物を知りたかったのだ。これ程勢いよく小高い山を愛撫する風に、接吻したかったのだ。山の高さと深さを計測し、長さと広さを計上して、知識を得て、あらゆる隠されたもの、あらゆる神秘的なものを知って、あらゆる所に聞き耳を立てて声を聞き、古い、太古のものに耳を傾け、至る所を走っては震え、目の喜びのために美しい場所を見て、あらゆる馴染みの場所の名前を見、全ての島民たちと知り合って彼らの魂を感じ、以前の島はどうで、現在の島がどうなっていて、そしてこれから島はどうなっていくのか、島の未来はどうなるのかを知り、土の上に横になって、愛する者の鼓動、生、魂を感じるために土に耳を付け、からからに乾いた裸の石を抱いて接吻したかった。嗚呼、私はあまりに、身を焦がす程に知識に対して渇いている。嗚呼、熱烈な愛情よ。お前が愛する島の山の端で、私の全てを捉えたのだ。

このサモトラケ人が口にしていた全てが私は気に入った。古の物の全てが、私には新しい物に思えた。

コイタダは、眼下のまさにそこ、木の生い茂った森である。そこは最良のオリーブ畑であり、そしてそこはオレンジ畑もあり、私たちの島で唯一自生しているものである。アンモスには梨が自生しており、最良の梨が取れる。葡萄畑は今や三つしかない。かつてはほとんどが葡萄だったのだが、病気によって干からびてしまったのだ。あの頂上には礼拝堂があり、預言者エリアが・・・いいか、私たちの島には蛇がいるのだ・・・大理石の人形をたくさん私たちが焼いたのだ。私たちが埋まっていた人形を見つけ出して、掘り起こして炉に入れて、石灰にしたのだ・・・トルコ人たちが破壊の時に私の祖父を虐殺した・・・その身を救おうと、彼の妻は逃げ出しながら自分の乳飲み子を岩から投げ捨てたのだ・・・

すぐさま神は、険しい岩山から足早に降って行ったが、ポセイダオンの歩むにつれて、その不死なる足の下で、

高い山も森もともに揺れ動いた[八]。

私が今まさに降りてきた未踏の遠い山を神が降っていた時、山と森は彼の不死なる歩みによって慄いていた。

しかし、私が降っていた時、山が震えてはいなかったのだが、サモトラケ人たちが像を石灰に変えた時のように、森を切って石炭にしてしまっていたのだ。

夕方、その場所は無風であった。太陽が打ち付ける根の間を剥がれた石が滑り落ちていたので、降りるのは困難であり、空気は熱されていた。水流が石と山を喰らっていた渓谷を私たちは通り過ぎた。まばらに立っていた何頭かの山羊が私たちを見て、びくびくしながら岩場の方へ去って行った。その時私たちは、石や岩、そして小石で一杯だった向かいの岸辺を歩いていたのだ。遠くの方で昼間の光によって海が輝き、右手には雨とぽつりぽつりと生えていた灌木で形成された、切り立った山がそびえ立っていた。私は突然極めて美しい、荒野で牧されていた、パルテノンのレリーフのような白い馬の群れを見た。我々に感付くや否や、毛並みの良い島の野性の白い馬たちは、堂々とした頭を上げ一瞬私たちを見て、群れになって駆け足で行ってしまった。何時間も向かいの頂でもう一度見たいと思って期待しながら馬を見ていたが、姿を消してしまっていた。

小道がなくなって、私たちは棘のある、杉やヒイラギ、そしてイグサの混ざった濃い灌木の枝に覆われた、下り坂にさしかかった。その全てが私の足に突き刺さっていた。左手下方を差して案内役が私に、何本かの木のせいでひびの上っていたパナギア・イ・クレミオティッサ教会を示した。向こうには、山々の開けたところに未踏の砂浜が見えており、再び美しい海を見ることができた。先に進むにつれて、山々が混ざり合って海は消えてしまった。

後で、私たちは再び荒れ果てた小道を見つけて、山の方に戻って木々の中にまばらに農家のあった西側の、照らされた海岸を見て、湧き出る水とリンゴとオリーブ、厳重に囲われ十分に水のやられた花壇と、小さな家々のあるクルベティを通った。そして囲いの中越しに再び枝が輝いて、生気溢れる海が浮かび上がっていた。このように進みながら、夕方には人の手の加わっていない果樹園とオリーブで満ちた田舎のラコマに到着した。

サモトラケ人たちがホラに戻るために馬を見つけに行っていた間、私はオリーブが生い茂り家々もまばらだった、広い渓谷の窪みの方を振り返りながら、乾物屋の葡萄棚の下に座った。渓谷が通過する二つの丘の間では、輝く海が再び姿を現し、向こうには夕方の細い日差しに愛撫されたリムノス島が見える。少し経って、我がサモ

トラケ人同行者がやって来て木のベンチに座った。少し脇の同じテラスに、髭を蓄えだぶだぶのズボンと麦わら帽子を身に着けた男性が一人座っていた。他の人々も少しずつ集まって来た。赤いスカーフを頭に巻いた二人の羊飼いケハヤデス[九]と麦わら帽子をかぶったインブロス島出身の二人の船乗り、それに、片腕しかない、髭を蓄えたやつれたサモトラケ人の若者もいたが、彼もだぶだぶのズボンと麦わら帽子を身につけ、顔つきも気立てがよさそうであった。彼の足は裸足で日によって焼かれ、貧相に見えていた。私は彼に働くことができるのかどうか尋ねた。かの男はどこか恥ずかしそうに――「私は教師なんですよ」と答えた。彼はラコマで文字を教える教師を務めており、時折子供たちを集めて文字をいくつか教えてやっているのだ。彼自身は自分の実力に自身がなく、だから私に自分が教師をやっていると言いながら、ばつの悪そうにしていたのだ。私は彼が恥じ入る姿が好きだった。しかし気の毒な彼は片腕しかなく、どうやって畑で働けというのだ？　ほとんどオリーブを集めることとさえできなかったことだろう。何をやるというのだ？　人間というのはひょっとすると、彼もそうだが、生きるべきではなかったのだろうか？　そして島民たちは極めて質素である。しかし私は、このような教師がラコマにいてくれることが嬉しく、理性を働かせて、構文法や聖書などの生半可な知識を身に着けて、学者ぶって子供たちに異様な重荷を負わせ、中途半端で、人生の中でかくも役に立たない知識で子供たちの頭をひん曲がらせてしまっている輩などより、彼の方がよっぽど子供に音節に区切って読み方を教えてやるだけでもふさわしい人材なのだと言ってやった。私が彼を見た時、初めは教師が私に関心を起こさせることもなく、彼が教師だとも思わなかった。私は、この教師が自分の同郷人たちと何ら変わることなく、ただ片腕がないだけで、彼も自分のパンを稼ぐために子供の時分にホラで学んだ読み書きの最小限の知識を使おうとだけ考えていたことを喜んでいるのだ。ラコマが彼をフランクの油にまみれた服を着て、鵜呑みにすることしかないような数万もの文法規則を詰め込んだ、外国風で衒学的な教師の頭でっかちのようにしてしまうことのなかったことを喜んでいる。ラコマで、恐ろしいあれら南京虫ども――どこかしらの国民大学の卒業生のことだが――仰々しい知識の羅列とマカロニ言語で知識のない子供たちと偶々彼らの所に来てしまった外国人たちを死なせてしまった奴等に出会わずに済んだのを

喜んでいる。この感じの良い表情の、色の落ちた清潔なだぶだぶズボンと麦わら帽子を身に着けた、片腕のない裸足のサモトラケ人は、私に何の言葉も発せず、不定法を使ったり使わなかったりもした。私が質問した時にだけ答え、愛と寛容をもって村の子供たちについて、もし子供たちが両親について畑や脱穀場、そしてオリーブの番をしないですめば、容易に文字を学んで、よりよく学ぶことができるのに、と言っていた。この時も、私に対して清潔で整備されていない島の馴染みの場所を台無しにすることのなかった、この教師が大好きだった。

もちろん、島民たちをより人間的にするためにこの場所の王であればよかったのになぁと思った。しかし再び、考え直して結果を予測してから、「それでその次は？」と言った。私の改革者然とした王の気分も全て興ざめしてしまった。昔の如き島民たちが私の理想の大部分を覚ませてしまったのだ。

島民の二人が、木炭を積み込むためにインブロス島の小舟を泊めていた、マクロリエスから上って来た。彼らに顔見知りの老公であるヨアニコスについて尋ねた。彼は元気で、島民たちに愛されているという答えがあった。ケハヤデスのインブロスの船でテネドスから持ってきた葡萄酒についての話しを聞いた。それから彼らは穏やかに、興味がなさげに、今朝彼らの所から脱走してまだ見つかっていない雌山羊について語っていた。私の案内人は彼らに、私たちが昼頃五、六頭の山羊を渓谷で見かけたと言って、どの場所か説明してやった。極めて高貴な怠惰を有し、急ぐということをつゆも知らなかった二人のサモトラケ人羊飼いは、一日中探し回って見つけられなかった後でも、走って島全体を一周し、何時間でも岩場で五頭の山羊を追いかける用意が今やできていた。だがひょっとすると彼らの生業は他にあるのではなかろうか？

私は葡萄酒を全て注いだ。私たちはまだ馬に乗っていなかったのだ。日は暮れたが、ホラまでまだ二時間の距離があった。馬が私たちを運んでくれるまで、私たちは礼拝堂へと行った――そこの村には他に教会がなかったのだ――そして脱穀場と高台を通った。脱穀している者がいた。少女が臼棒の上に立って馬を御し、脱穀場の周りを廻らせていた。他の者はもみ殻を吹き飛ばしていた。

ここより向こう、向かいのマヴリアノスの脱穀場で、十二人がもみ殻を吹き飛ばし、

十人は一緒になって興に耽り、
そして浅黒い少女が一人脱穀場で遊んでいる。
母親が彼女に話しかけ、こう言った。
――砂埃から出てきなさい、娘よ。
日差しから出てきなさい。
――私太陽が好きなのよ。砂埃が大好きなの。
お母さん、もみ殻を吹き飛ばしている
一人目の男の人を私の夫にしてよ。
――娘よ、あの人は持参金がたくさんほしいんだそうよ。
星々の羊と月の山羊がほしくって
明の明星の家畜小屋で家畜を飼いたいんだそうよ。

一体、既に親類の結婚式で歌ったことがあってこの歌をもちろん知っていた島の脱穀娘は、こんなことを考えていたのだろうか？　これは彼らの歌であり、彼らの全生涯なのだ！　脱穀が中断し、少女が、我々のことを余所者だと見て取ったのか、ショールを直し、手で顔の前の乱れた髪を集めて、髪の分け目が見えなくなって我々が公衆の前で彼女を非難することの無いようにまっすぐに伸ばした。去年の聖ヨハネ前夜祭で、彼女は占いで一体何を知ったのであろうか？

私は礼拝堂へと上った。礼拝堂は貧相でとても小さく、司祭は村で生活しているわけではなかったので、規定通りに司式を執り行ってはいなかった。時々洗礼や結婚、そして塗油のためにホラからやって来た。そして私たちに同行していた村民は、クセロポタモから冬の川水が流れてくる時には、渓谷を渡ることができなくなり、だから司祭もホラから来れなくなって、子供はしばらく未洗礼のまま放っておかれ、死者も死者の祈りを唱えられずに埋葬され、聖人大祭も司式者無しで執り行われるのだと言った。だが礼拝堂の燭台には火が灯されていた。私は蝋燭に火を灯し、これを鉄製の大きく作られた大燭台の上に置いた。私は五人のフスタネッラを穿いた人物が描かれたイコンを見た。彼らの名前もその頭の上に記入されており、マヌイル、テオドロス、ゲオルギオス、ミカイル、そしてもう一人ゲオルギオスであった。五人の若きサモトラケの殉教者たちは、大惨事の数年後にコンスタンティノープルでムスリムになってから戻って来たのだが、再び基督者になったのでトルコ人に捕まって拷問を受け、マクリで死んでしまったのだ。彼らの記憶は毎年四月六日にサモトラケ島のマクリと聖山で祝われており、ヤコヴォスとかいう修道士が特別な式文を書いた

そうだ。

馬が引いてこられ、私たちは馬に乗った。クセリポタミアを通り過ぎ、遠くにマクロリエスと、あたかも島民たちを殺して島を荒廃させようとしてやってきたトルコ人たちも船を横付けした、まさにその場所に碇を下ろしたインブロスの小舟を見た。そしてオリーブや畑、柵や晩ごとに大気に涼しい気な香りを放っていた花盛のコリヤナギを通って、サモトラケ島へと上った。村は静かで、所々窓に灯りがついていた。西の方で、ほとんど消えかかっていた最後の青白い照り返しが輝くや、一つまた一つと星が出始めていた。

---

**【注】**

**一** Ιων Δραγούμης（一八七八―一九二〇）：外交官、政治家、ギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のあるステファノス・ドラグミス。バレスやニーチェの思想に影響を受ける。著作に『ギリシア文化』、『私のヘレニスムとギリシア』。

**二** 底本に Δραγούμης Ιων (1994b), *Σαμοθράκη, Το νησί*, Εκδόσεις ΒΑΣ.ΠΗΓΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη.を使用している。

**三** 原文で μουδήρις。オスマン語で مدير 。地方行政官の意。

**四** Βακχυλίδης: 紀元前五一〇年か紀元前四五〇年ごろに活躍したギリシアの抒情詩人。シラクサのヒエロン一世の宮廷でピンダロスと腕を競った。本文掲載の詩の訳は訳者による。

**五** 「月」を意味する、標高一六一一ｍのサモトラケ島の山。

**六** 『イリアス』第十三歌十―十四行目より。なお、以降の『イリアス』はホメロス著、松平千秋訳『イリアス』岩波書店、一九九二年、からの引用。

**七** 『イリアス』第十三歌十五―十六行目より。

**八** 『イリアス』第十三歌十七―二十行目より。

**九** 原文で κεχαγιάδες。トルコ語で kâhya。高官、幹部の意味。